

2007年 8月

アースウォッチジャパン  
花王教員フェローシッププロジェクト  
関係者各位

江戸川区立  
小松川小学校

渡邊 美穂子

花王教員フェローシップ アースウォッチジャパン

海外プロジェクト

「モーレイ湾のいるかとくじら」チームVI 参加報告



主催 : Earth Watch Japan  
教員フェローシップ企業 : 花王株式会社

# 目次

## 1, プロジェクトの内容

- (1) 期間
- (2) 選考から出発に至るまでの流れ
- (3) テーマ
- (4) 研修の目的

## 2, 調査の内容

- (1) 調査地および施設について
- (2) 調査の目的と方法
- (3) スタッフについて
- (4) 参加ボランティアについて
- (5) ボランティアの役割

## 3, 体験報告記

### I 出発前

### II 出発

### III 帰国後

## 4, 生活について

### (1) 食事

### (2) 夜の楽しみ

## 5, プロジェクトを終えて ～体験から感じたこと～

## 6, 今後の課題

- (1) 持続可能な環境教育の必要性
- (2) 他文化理解教育の必要性

# 1、プロジェクトの概要

(1) 期間 2007年 7月28日(金)～8月10日(金)

[渡航にかかった前後二日間を含む。]

## (2) 選考から出発に至るまでの流れ

- 3月～4月 応募書類の提出  
5月 合格の可否通知  
5月～7月 現地集合場所までの渡航の手配、査証の取得、必要な予防接種  
必要書類の提出(Personal Profile、Health Form、Water-based projects、  
Travel Details Form、Liability Release)  
ブリーフィングの精読、荷物の準備  
7月～8月 プロジェクトへの参加  
8月～9月 体験報告書の作成、授業  
10月 報告会への出席

## (3) 参加プロジェクトのテーマ

「モーレイ湾のクジラとイルカ」

## (4) 参加の目的

- 1、豊富な海洋資源を持つスコットランドの北東岸におけるクジラ目類の生態を通して、環境の現実を知ること
  - 2、スタッフや他のボランティアとの交流を通して、他文化の良さを知ること
  - 3、知り得たことを効果的な形で、教育の現場に還元すること
- 上記の3点を念頭において、調査に出かけました。

# 2、調査の概要

## (1) 調査地および施設について

国名 スコットランド

地域 モーレイ湾の南沿岸

バンフ近郊のガーデンズダウンという漁師町のリサーチセンター(CRRU)

- i スコットランドについて・・・面積はブリテン島の3分の1を占め、北海道とほぼ

同じ面積になる。人口は約 5 百万人。首都はエディンバラである。その国土の北半分はハイランドと呼ばれ、高い樹木のほとんどない荒涼とした大地、氷河によって削られた谷、険しい山々など厳しい表情の景観が続く。一方、南半分のローランドは、緑の多いなだらかな丘陵や平原が続き、羊の群が草をはむのどかな風景を楽しむことができます。スコットランドの観光は、エジンバラかグラスゴーの 2 つの大都市が拠点になります。美しい景観を楽しむため、ヨーロッパをはじめ世界各地から多数の観光客が訪れる。スコッチウイスキーの産地としても名高く、全土に 100カ所を超える蒸留所が点在する。天候は変わりやすく、雨や霧の日が多い（滞在時も何度か突然の雨に見まわれた。）。北部に位置しているため夏でも気温はさほど高くはならず、調査時も 10 度前後だった。

ii ガーデズタウン・・・美しい漁師町。1720年にアレキサンダー・ガーデンによって設立された町。

西へ向かう丘陵地が、町の大半から臨まれる。人々は、時間がゆっくりと感じるくらい穏やかに暮らしていると感じた。（飼われている犬もとても人なつこく、余裕があるように感じてしまった。）



ガーデンズタウンの風景  
写真は \*1 より

#### 宿泊施設について

GRRU の本部であるオフィスから歩いて 2 分ほどの“NO 2”と呼ばれる場所で生活した。キッチン、リビングルーム、ダイニングルーム、バスルーム（ユニット式）、同行者の江濱さんとの共同のベッドルーム、また、イギリス人と、ドイツ人の女性 3 名のベッドルームがあった。オフィスの一室にも残りの 3 名が寝泊まりした。食事は基本的に“NO2”のダイニングルームで取るようになっていた。



←晴れた日は外のデッキでバーベキューをしたり、ひなたぼっこをした。

↑“NO 2”の外観。鍵が 3 つあり、共同で使っていた。



←ベッドルーム  
波の音、鳥の声が聞こえる。ベッドに寝袋を置いて寝た。



ダイニングルーム←↓  
ここで食事をとったり、ゲームをしたり、くつろいだりした。



## (2) 調査内容

近年の調査は、ボートに乗って行うライトラセクト調査と、個体識別用の写真撮影を行う。一般のクジラ目個体群と起伏に富んで異質な生態系となっているモーレイ湾外洋南岸に生息する個体群との関係を解き明かすことを目指している。これらの調査結果は、調査域全域における個体数測定、さらに彼らの生活史、発生、群同士の関係、基本的生態といったことを理解するのに不可欠な個体群パラメーターの決定に非常に有効なデータとなる。

### (3) スタッフについて

途中、入れかわりはあったが、全期間を通して関わっていただいたスタッフは6名。ディレクターであり、ウェールズ大学の教授である Dr. Kevin を中心に、女性スタッフ3名、男性スタッフ3名が生活の助け、質問への対応、講義、ボートでの調査への同行をしてくれた。みな年齢は若い、研究熱心であるとともに、自然を愛し、環境保護に対して深い探究心をもつ素晴らしい方ばかりだった。

### (4) 参加ボランティアについて

出身地：UK 4名、日本 2名、アメリカ 1名、ドイツ1名  
性別：男性1名 女性7名

### (5) ボランティアの役割

その日の天候によって、海上に出かけるか、オフィスでレクチャーを受けるかを決定していた。

#### i 調査活動

海上での個体の発見、個数確認、個体群の構成と行動の記録、位置情報の読みとりと写真やビデオ撮影などの手伝い。また、海から上がったなら、個体識別用の写真の整理や、データの解析、データ入力などを行う。座礁事故が起きた際にはスタッフの補助をする。



↑ Orca II と Katus

#### ii トレーニング

ボートに乗って調査を始める前に、安全やボートの操作についてのレクチャーを受ける。また、雨天時、波が荒れているときには、下記のようなレクチャーも受けた。

- イルカやクジラの種類の紹介（見分け方、生態、自然史、分布と社会行動など）
- 個体識別の方法（方法と個体の追跡、識別法の将来など）
- クジラ目類の救助（座礁の原因、評価手順、救急救助法や運搬方法など。）
- データベースの使い方（CRRU のデータベースと、個体識別方法の説明。）
- 分類と特徴（イギリス海峡で見られるクジラ目の動物の身体的な特徴、行動、それぞれの違いについて。）
- その他の野生動物やスコットランドについて（スコットランドの風土や文化、自然の中に生きる動植物など。）



## 3、体験報告記

### I 出発前

#### 4月始め

ある週刊誌の記事が目にとまった。それは、昨年度応募したが通過しなかった野外調査プロジェクトが今年度も同じような形で募集をかけているものだった。締め切りまであと一週間。正直なところ、昨年度通過しなかったということで今年度応募したところで、まただめだろうかと、始めから思っていた。けれど、自分としては、昨年度以上に、「国際的なもの」、「環境」に対する興味が沸いていた。今後の教育において、この二つのことに対して教師自身が研鑽を深める必要があると強く感じていた。1200字という短い論文だったが、自分自身のそのような思いを改めて見つめなおすような気持ちで、素直に感じていることをまとめ、提出した。

#### 5月始め

「多分だめだったのだろうか・・・。」

と思って、受信メールを見ていると、なんと「合格」の二文字が。「やったあ！」と喜んだのもつかの間、すぐに冷静になり、いくつかの問題点が頭の中によぎった。

「夏休み中といえ、こんなに長期間不在にしていいのだろうか。何か予定が組まれていなかったか。」

「英語での生活と書いてあるが、果たして自分の英語が通じるのだろうか。」

体当たりで応募してみたものの、実際に行くことになってみたときの場合を細かく想定していなかったのだ。けれども、持ち前の能天気さで、「何とかなるだろう。」と考え、とりあえず勤務校の管理職に相談した。ありがたいことにすぐに許可を出していただき、準備の段階に入ることができた。ただし、もちろん行く前に英語の勉強や、必要なものを揃えるための時間が必要であるし、当然夏季休業中とはいえ急務の際には不在ゆえの対応をしていただければならないと思ったので、仕事には支障がないように、自分なりに時間をうまく使って校内の先生方には迷惑をかけないようにしたいと思い、気を引き締めた。

### II 出発！

date 7月28日

出発の直前

朝5時に目が覚めてしまった。前夜は、いろいろなことを考えながら、しばらく布団の中でうつらうつらとしていたが、結局12時前には眠りにつくことができ、寝不足の感はない。



歴史を持った町である。そして花が美しい町といわれるスコットランド第3の都市である（エジンバラ、グラスゴーにつぐ。）

3：35発 Banff行き £9

このとき、出発のバス停で、ボランティアのメンバーである Emily に会った。彼女はアメリカから参加している大学生。なんとこのプロジェクトに参加する前に、スペインでも同じような感じのプロジェクトに2週間参加していると言う。すばらしいバイタリティに驚いた。とても気さくに話しかけてくれ、これから出会える仲間との生活への期待が高まった。1時間20分バスに揺られる。バスの中ではひたすら景色に見とれた。都市の風景もさながら、少し立つと、ただただ広大な緑の景色でいっぱいになる。丘には羊や馬、牛が放牧され、どこまでも黄金色の小麦畑が広がる場所もあった。日本とは比べものにならないくらい自然が豊か……。と思いきや、この旅の中でその思いが覆される気持ちになることがあったこともこの時点では知らなかった。。

バスを降り、着いたところは Banff の 305 バスストップそこで、新たに二人のメンバーと対面した。ロンドンから来た Claudia と、ドイツから参加している Jessica。お互いにあいさつした。そこに、Cetacean Research & Rescue Uni(以下 CRRU)のメンバーが合流。スタッフの Nina、Livia、Helen だった。あいさつをし、荷物を預け、ジープに乗り込んだ。施設に向かう途中、3人の知り合いの家に寄る。肉をわけてもらっていた。なぜかはわからないが、その家に住むご夫婦は、初対面の私たちにも大きな笑顔とやさしい握手で接してくれた。正直に言うと、この時点で周りの英語がほとんど聞き取れず不安に感

じていた私だったが、どこの国でも、結局は人と人とのつながりだということを感じた。いよいよ、これからの2週間の滞在地、Gardenstown に到着。私たちが生活するのは、C



RRUの本拠地であるオフィスからほんの数歩の「No 2」という建物。

また、プロジェクトのディレクターでありウェールズの大学の教授でもある、Dr Kevinの紹介と、施設利用の説明を受ける。自分たちで、調理や掃除などをしていく共同生活にとってもわくわくした。

夜は、スタッフ中心に、ボランティアも手伝いながら料理を準備した。メニューは、ベイクドポテト、スクランブルエッグ、にんじん・レタス・パプリカ・コーンなどのサラダ、煮豆とたまねぎの炒め物など。素材の味を大切にしている料理だと思った。少し薄味に感じたが、それは私たちが日頃味付けの濃いものや調味料を多用したものを口に入れているからかもしれないと思った。

このとき、きちんとした自己紹介の時間があつた。みんなが流暢な英語を話す中、自分の自己紹介の仕方を考えた。正直に言うと、飛び交う言葉の中で単語を拾うのがやっとだった。ここに来てはじめて、「英語を話せない参加者がいる」ということが全く意識されている場ではないということに気づき始めていた。それは第一に、自分の危機感が足りなかったこと(少し会話力が十分でないものに対しても配慮があるのではないかと高をくくっていたこと)、そして、数あるアースウォッチのプロジェクトの中で、このプロジェクトは日本人を受け入れるのは初めてだということがあつたと思う。少なくとも、ボランティアに安くはない費用を支払い、有志として参加しているボランティア、スタッフとしても、英語がわからない日本人のために時間を割く暇はないのに、「理解が不十分な人間がいること」を伝えられることをとても重荷に感じるのではないだろうか、と思った。同行者の江濱さんに関しては、会話力に問題はなく、伝えるなら、自分の個人的な問題として、はじめのこの時点で、自分の言葉で伝えておきたいと感じた。いよいよ自分の番になったとき、

「英語での会話力に自信がないこと、

けれども最善を尽くしたいこと  
そしてこの旅でわかったことを日本で子どもたちや、期待してくれている人たちに伝える使命があること」

を伝えた。非常に拙い英語だったに違いないが、教員としての自分ではなく、一人の人間として「できない」ことからスタートすることは恥ずかしくも大切なことだと自分の行動には納得している。

その後、夜の海へと散歩した。午後10時なのに、空はぼんやりと明るい。白夜に近いのだろうか…。その海では、プランクトンによる汚染物質を目にした。洗剤の泡のような、汚染が岸壁に溜まっている。もちろん日本でも見たことはあるが、こんなに北の最果ての海でも汚染が進んでいることにショックを受ける。環境に関しては傍観している暇はないと、改めて感じた。深夜1時でも明るい。時差ボケもあり、何となく時間の経過が掴めないうまま、眠りについた。

date 7月30日

この日は天候不順のため、海には出られない。ということで、オフィスでレクチャーを受けた。

午前中は

CRRUの活動についての講義を受けた。

活動の意義、主な活動の手順。

科学的調査、環境教育、病気や座礁した海洋哺乳類への専門的医療措置を通じて保全保護を進めていくことへの意義について理解を深めた。

午後は

安全についての講義を受けた。

ボートに乗る際の荷物(食料、記録用紙、防寒着、持って行ってはいけないものなど)、緊急時対応、ボディースーツの着用の仕方片付けの仕方、ボートの付属品(発煙灯、GSPなど)の使用法、ロープの結び方(接岸の際など外れないような結び方)などを教わった。

終了後ショートトリップに出かけた。

行程は、

雑貨洋品店→アイスクリーム屋さん→古城散策  
→海→お墓

また、夜は、バーベキューをして楽しんだ。

→ロープの結びかたの講義中  
↓古城の遺跡 ↓海の中の洞窟



アシスタントの Helen と Gary.  
プレゼンテーション用のソフトを使い、講義を行う。



date 7月31日

朝の波音を聞いて、前日より穏やかだったので、今日は海に出られそうな予感がしていた。前日もそうだったが、朝ごはんは個人で用意して食べる。それぞれの好みもあるが、パン、フレーク、果物、ジュースなどキッチンにあるものは何でも使ってよい。私は結局毎日、フレーク、りんご、オレンジジュースの組み合わせだった。顔を合わせたメンバーとは、笑顔で挨拶をするように心がけた。

身支度が整ったら、オフィスに向かい、ボートに乗る準備をした。ボートに乗るのは Gardentown からではなく、違う港から。ゴムボートは、OrcaII と Katus の2つがある。この日は、Whitehills という港から出航した。

この日初めて、海に出た日の感動は一生忘れられないと思う。どこまでも続く水平線。鳥の音が響き渡り、時々すれ違うヨット以外は文字通り、ほかの何物からも切り離された世界。

それぞれの観察方向を分担しながら、いるかやクジラを見つけるために目を光らせる。分担方法としては、船の進行方向に対して、時計の針で何時の方向という風に示していく。(進行方向は12時の方向とする。)早速単独の Bottlenose dolphin(バンドウイルカ)に出会った。

とはいえ、この日初めての船酔いも経験した。波の動きばかり見ていたのがいけなかったのだろう。スタッフの Nina に、

「水平線を見て。平らなものを見れば収まります。」

というアドバイスを受け、持ちこたえて、港に戻った。

この日の夜は、夕飯を食べた後、他のメンバーとともに日本から持ってきた折り紙をやった。折鶴とボートの折り方を説明しながら、楽しい時間を過ごした。

その後ランプをして楽しんだ。24時間過ごしたおかげか、徐々にそれぞれのキャラクターがわかってきて、会話も試みることができるようになった。文化や物が心をつなぐことを感じた。



date 8月1日

みんなで折った折鶴と、ボート(OrcaII とボートの名前が書いてある。)

この日、朝一番にディレクターである Kevin が西海岸へ調査に行くために旅立った。この後は残ったスタッフと共に調査を進めていく。準備をして、Whitehill より、出航。この日は、Bottlenose Dolphin 3匹に遭遇した。位置調査をするために、出会ったときの状

況は必ずシートに書き込む。時間帯や GPS での位置、深度、見られた行動などの詳細の書き方を教わった。また、それぞれの個体を識別するためには、背びれの形が重要なので、写真での撮影も同時に行われる。ボランティアもスタッフも協力し合って調査を進めた。このようなやり方はレクチャーの中でも話があったが、実際に海に出て体験してみて、納得することができた。

出航前に準備したサンドイッチを海上で食べる。サンドイッチのほかにもビスケットや、カットされたフルーツ、ジュースなど。糖分や水分は随時こまめに補給していく。

午後は、海鳥がたくさんいる岬に行き、そこでたくさんの porpoise (ねずみいるか) に遭遇した。横からだけではなく、上から写真を撮影したりした。港にもどった後、今日の作業の成果を打ちこもうとしていたところ、

「minkei whale が港に迷いこんでしまった。」

との一報がオフィスに入る。

夕食代わりのサンドイッチを準備して港に戻る。港には迷いこんだ minkie whale の姿とたくさん見物客がいた。

なんとなく一大騒動が巻き起こったような雰囲気。CRRU のメンバーが、ボートに乗り、外のチーム（座礁してしまったくじらやイルカを助ける他の団体やダイバーたち。）のメンバーと、取り囲んで、港から海に出そうと試みたがこの日は whale を追い出すことはできなかった。



date 8月2日

この日も minkie whale を見に行った。

午前中は、オフィスで待機していた。近くの商店街に買いものに行ったり、日本にメールを打ったりしていた。インターネットが繋がられる環境にあるにはあるが、できるだけ日本に連絡をしないようにしてはいる。日本では常に情報が耳に入る環境にあり、そういうものから切り離して生活することでどのように感じるのかを試してみるつもりでいる。日本の若者の間でも、携帯電話やインターネットで誰かとつながっていないと安心できない気持ちになり、増えているといわれており、私もその傾向はある。しかしこの旅の中で自分自身のこと、地球や自然のことなどをじっくりと考え、自分の頭をクリアにすることができるようになったと感じた。たまにはこのように、情報に左右されない時間も大切と感じた。

午後は、前日と同じ港に向かった。ボートにのって救助を手伝うのは CRRU の仕事なので、ボランティアスタッフは、サンドイッチや飲み物をもって待機していた。その間に、生活

に必要な食材などを補充するためにボランティアメンバーで、スーパーに行った。来店した時間が、7時少し前。お店の中をしばらく歩くと、歩いているそばから照明が消されていく。「停電?」と思ったが、そのような放送もない。他のメンバーに聞いたところ7時閉店なのだとのこと。日本のスーパーだったら客がいたら電気は消さない。しかし欧米ではこのように店側も時間を厳格に守る。労働者も自分の勤務時間をシビアに考えているということだろう。日本のようなやり方は客に優しいといえれば優しいのかもしれないが消費者の甘えを助長してしまうところもあるのは否めない。(日本では閉店時間を過ぎても堂々と店に入ったり、入るのを拒まれると文句さえ言い出す客の姿も目にする。)

その後、港の岸に戻り、救助隊の動きに目を配った。Minkie whale を追い出すためにはボートで囲いこんで、高い音を出す。司令塔からの司令で、whale が呼吸のために水面に上がってきた瞬間に一齐に取り囲もうとするがそのタイミングがなかなか難しいようだ。取り囲んだと思ったらすぐにボートの間を縫って、全然予想していない場所から顔を出す。頭のいい動物なので、人間の動きを予測しているかのように人間の狙いをはずしたような行動をとる。何度か港の入り口まで追い込んだかのように見えたが、結局この日は最後まで救出することはできなかった。その前日もだが、11時半ごろ帰宅。まだ薄暗い程度である。

それにしても、この日も見物客が多かった。珍しい自体なのかもしれないが、みんな10時になっても11時になっても帰ろうとしない。同じような状況が日本で起こったとしても、自分だったら平日遅くどこまで注目してられないように思う。ここの人たちは whale の命を人間と同等に感じているのかもしれないと思った。

戻った後、近くのパブに行った。ワインをいっぱい飲んだが、にぎやかにみんなおいしそうにお酒を飲んでいた。雰囲気がとてもよかった。



たくさんボートが協力して、minkie whale に近づいていく。



↑パブの風景



↑呼吸をしに、水面に時々姿を見せる。

### date 8月3日

この日は午前中は、生活スペースの掃除をした。こちらの掃除も基本的には日本と同じだが、掃除機やポットなどの電化製品の使い方に慣れず、少し苦勞をした。その後、オフィスで、くじらやいるかについての講義を受けた。くじらの出現について、骨格について、いるかとくじらの種類について。くじら目類は大きく分けて、ヒゲクジラ亜目と、ハクジラ亜目に分けることができる。それぞれの特徴、さらにもっと細かく分類されたそれぞれの種について、学んだ。初めて知ることが多かった。現在80数種のクジラ目があり、その数種が絶滅の危惧にさらされていることや、その多くが社会性を持ち、またとても賢いいくつかの行動をとることには驚いた。午後は、ボートに乗った。Gardenstown から、whitehills へ。この日はスタッフといろいろな話をした。CRRU に関わった経緯などを聞く。やはり自分と同じようにボランティアからスタートをして、いるかやくじらたちの魅力に虜になって、Dr. Kevin に直接交渉して、スタッフに加わった人も何人もいることもわかった。環境に興味を持ち、危機感を感じ、何かしたい・・・。そのような気持ちをもつ取っ掛かりとしてアースウォッチのプロジェクトが大いに役立っていることがわかった。

### date 8月4日

この日は近くの散策に行った。まずは牧場に行った。羊たちが放牧される丘を歩き、海鳥がたくさんいる崖に立った。海も空も日本につながっているが、なんて悠々と生きているのだろうと感じた。その後スーパーに行き、お昼ごはんを買った。一度オフィスに帰って、今度は海岸へ。海の上を渡りながら、ダイビングスポットに行った。私はやらなかったが、何人かが挑戦した。あんな風にできたらいいのになと、少しうらやましく感じた。



←羊がたくさんいる  
のどかな丘。

↓丘の上から海を見た。  
たくさんの海鳥が見え  
た。



↑ダイビング。とても気持ちよ  
さそう！



スポットから戻る途中、右の羽を怪我したかもめと遭遇。



スタッフが保護した。大切に病院に届ける。写真の女性は **nina** というスタッフだが、彼女は菜食主義者で肉は食べない。鳥へのとても優しい扱い方を見て、なんとなくそのルーツがわかった気がした。帰ってスタッフと一緒に料理を作った。ねぎのパイとチーズカッスル(ポテトとチーズ)、サラダ。スコットランド人のスタッフが作ってくれたり、イタリア人のスタッフが作ってくれたりするので、夕飯は多様な種類のものを食べる事ができた。

date 8月5日

この日は一日オフをもらい、**Aberdeen** まで行って、一日買い物をする事ができた。プロジェクトも折り返し地点を過ぎ、日本に帰ることも頭の中によぎるようになってきた。ただ、この後またできるだけたくさんの物を吸収して、帰国したいと改めて思った。**Aberdeen** では、まず **Thomas Glaver** 邸へ行った。同行者である江濱先生が長崎出身であることもあり、一緒に行ったが、江戸時代にスコットランドからやってきて、その後の日本を変えていく人々(伊藤博文や井上馨など。)が留学するのを手引きした。このような形で日本との関わりを持っている人の存在を知ってびっくりした。その後買い物をした。この日は、夕食に、チキン、グリルドベジタブル、プディングをたべた。真夜中には、みんなでキッチンでダンスをした。夕食後にゲームをしたり、ダンスをしたりするごとに、言語以上に心が通じ合うものが生まれる気がしている。



date 8月6日

この日は朝から海がとても荒れていたので一日中講義を受けた。12時から minkie whale について。16時から、くじらやいるかの見分け方についての講義を受けた。見分けることによって出産や死亡といった個体の生活史が浮き彫りにされる。また、回遊や移動の実態、個体数の正確な測定が可能になる。さらに彼らの社会のありようについても知ることができる。見分け方は、主として、背びれや尾びれの傷によって行われる。特徴的な背びれをもっており、識別の容易な個体もある。わかりづらいものもある。実際の写真を見たり、判別用のデータベースなどを確認し、作業工程を学んでいった。一日一日の地道な作業の中で、新たなことを発見しようとしている姿勢がすばらしいと感じた。また、ボートに乗っている際は、海鳥の集まっているところにボートを近づけていった。そういうところは豊かなえさ場があるとして、クジラやイルカがやってきている場合も多いという。

date 8月7日

この日は OrcaII で、海に出た。少し寒かったが二時間ほどの航海。この日は結局一匹も遭遇しなかった。波の状態によってはこんなこともあるらしい。海から上がった後、展望台のようなタワーと、傷ついた動物を保護するセンターへここで、保護されているたくさんの動物たちをみた。フクロウ、ワシ、鳩など。見ているうちに、これら猛禽類のえさとなる、ひよこが山積みされていた。「何かを生かすためにほかのものが犠牲になる。」そんなことが頭に浮かんだ。この場所でたくさんのかんことを感じたので、それは「今後の課題」のところで述べることにする。

あと2日。メンバーの中になんとか別れを感じるような雰囲気がある。私もあと2日という期間を意識し始めている。この数日の間でそれぞれのキャラクターがわかり、たくさんの点で助けられた。たくさんの会話の中でコミュニケーションをとってきた人もいれば、さりげないコミュニケーションの中で助けてもらった人もいる。いつのまにかこの仲間が大好きになっていた。たった数日間の体験が価値観を大きく変えてくれた。この経験は必ず、教育活動や、自分自身の今後にかさねばもったいないと思った。





date 8月8日

海に出られる最後の日。鳥の声をゆったりと聞きながら目覚める朝も最後だと思うと朝からとても切ない気持ちだ。初めの数日、会話がわからなくて、なんとなく目覚めが悪かった日も懐かしい。この日は明日の便の予定を聞かれることからが始まった。その後、居室も含めた生活空間を掃除した。さすがに10日近く生活をしていたので汚れも溜まっていると感じた。その後オフィスに行き、今日の作業について話を聞いた。今日は OrcaII にのる。波が穏やかになるまで待ち、結局午後の4時ごろに出港した。最後の航海。この日の航海は最高のもとなった。初めの1時間はいるかもくじらも姿も形も見せなかった。「このまま会えないままなのかな・・・。」と寂しい気持ちになり乗っていたが、7時ごろ、航路の先にスタッフが、イルカのむれを見つけた。やった！7匹の集団で、位置を確認したり、写真を撮影したりして、みんな高揚した気分で帰路に着いた。帰路についている途中、アザラシがたくさんいる岬を通った。空も暗くなり、港に帰ろうとしたところ、自分の目の端に、背びれのようなものが映った気がした。反射的に、

「ドルフィン??」

と叫んだところ、ほかのメンバーが私の方をみて、

「ドルフィン？」

とあっけにとられた顔をした。

「Yes! I saw Dolphin!」

と言ったところ、別のメンバーが、近くにドルフィンの群を見つけた。10匹ぐらいの群れがそこにはおり、私は自分が見つけたといううれしさと、最後の日に、たくさんドルフィンが別れを惜しむように現れてくれた奇跡にとっても感動した。ドルフィンの群はなんと自分たちの港のすぐ近くまで、ボートを取り囲むような感じで泳いでいた。最終日、こ

のような感動に出会えるとは思っていなかった。

その日は結局11時ごろに最後の食事として、近くのインド料理屋でカレーをたくさんテイクアウトした。本当はレストランでみんなで食べる予定だったのだけれども、帰港の時間が遅かったため、持ち帰りとなった。とてもおいしかった。

食事後、Dr.Kevin から修了書や記念のマグカップ、写真などをいただく。このメンバーと最高の夏を体験できたこと。みんなが協力しあってきたからこそ、それぞれが成長できたことを称えてもらい、また、感謝の言葉も言ってもらった。その後、みんなで別れの言葉を言った。今後も E メールで連絡を取り合ったり、お互いの国を行き来しあうときには連絡を取り合うことなどを約束したが、それでも涙が止まらなかった。12日間の凝縮された思い出が頭の中に次々とやってきた。言葉が通じないもどかしさ、それを助けてくれたメンバーの優しさ。これから生きていく場所は違えども、この体験を生かしあっていけることは何よりも深いつながりと感じた。

## date 8月9日

出発の日。私と同行の江浜さんは、ほかのメンバーよりもだいぶ早いフライトのため、みんなが寝静まっているときに、部屋を後にした。早い時間ながらも起きだしてくれたメンバーたちと抱き合って別れ、スタッフにバスストップまで送ってもらった。風景との別れも辛かったが、ノスタルジックに浸るよりも、日本に帰ってから、「環境」を守るためには自分自身で何ができるか、子どもたちの意識を高めるためにはどのような働きかけをしていかねばならないかという事を頭の中で考えた。

14時間のフライトを終え、

「ただいま、日本！」

### 4、生活について

#### (1) 食事について

基本的に朝ご飯は自分で食べたいものを作る。パンかコーンフレークを中心に、その日のよって果物やジュース・ミルクを合わせている人が多かったように思う。パンには、チーズや目玉焼き、ハム、トマト、レタスなどをはさんで食べていた。

昼はサンドイッチを作って海上で食べる。海にでなかった日はパスタを協力して作ったり、スーパーで出来合いのサンドイッチなどで済ませる日もあった。

夕飯は、基本的にはスタッフと一緒にメンバーで作る。日本の調味料や食材などを持っていけばメニューを提案することができたのにな、と思った。



- ラザニア
  - グリルドベジタブル
- ベジタリアンの nina が作ってくれた、肉がなくてもトマトやオリーブオイル、ほうれん草のもつ甘みで十分おいしい!



- プディング
  - グリルドベジタブル
  - ローストチキン
  - ポテト
- チキンは丸焼きのものを買ってきて骨から削って食べた。ズッキーニやブロッコリー、たまねぎなども自然な甘み。



- クスクス
- レタスやチーズが載っている。Dr.kevin が作ってくれた。男も女もリーダーもみんな調理をする。そのおかげで垣根のない和が生まれた気がする。



- カレー
  - ナン
  - チャパタ
- インド料理屋でテイクアウトしてきた。あつあつ。スパイスがよく効いていた。

(2) 夜の楽しみについて

夕食後はさまざまなレクリエーションで楽しんだ。



ゲーム中。  
ゲームの最中は言葉  
以上に雰囲気を楽し  
めた。



ダンスナイト。  
音楽をかけて、リビン  
グで踊りくるった。ス  
トレス発散。音楽や踊  
りを楽しむ気持ちに  
国境はない。



暇なときには誰かを誘  
ってゲーム。  
いつでも笑いが起こっ  
ている雰囲気だった。

## 5、プロジェクトを終えて

全行程を通して、一生涯忘れ得ないような最高に有意義な時間を過ごすことができた。もちろん、楽しいことばかりではない。自分自身の英語力のなさに悩んだり、コミュニケーションのとり方も手探りだったりした。悩んで眠れない夜もあった。だが、ほぼすべての時間通して「できない自分」や、「悩んでいる自分」「考えている自分」に対峙しているというこの状況自体を楽しめた。

教員になって5年目、子どもたちに課題を出すことはあっても、自分自身の課題とゆっくり向き合う時間はほとんどなかった。「何かしたい。」という気持ちや好奇心はあっても、時間がそれを許さないというのが、私だけではなく多くの教員の現状ではないだろうか。それにくわえて、大人になると、「できない自分と直面する」こと自体が怖いということもある。しかし、果たして教員自身が「できない自分、ままならない自分」を感じ、「悔しい！絶対に乗り越えてやる！」という気持ちを持たないで、子どもたちに「がんばれ！」という言葉を手から言えるだろうか、と常に感じていた。

今回は、幸運にも、アースウォッチ、花王株式会社の多大な協力を得て貴重な体験をさせてもらった。誰もがこのような機会を得て・・・ということは現状としては難しいと思うので、その分今回行かせてもらったからには、還元できるように資料化していかねばならないし、後続の方々のためによりよい環境が作れるように働きかけていかねばならないと感じている。

また、この旅で起こったたくさんの出会いにも感謝している。

ともに過ごした同じボランティアの仲間たち。言葉以上に深いコミュニケーションの取り方があることを学んだ。

また、現地でお世話になった CRRU のスタッフたち。自然を深く愛する気持ちがなければできない仕事をし、私たちの生活にたくさんの協力をしてくれた。別れ際、迷惑をたくさんかけたにも関わらず、仲間を失うかのように惜しんでくれた。たくさんのことを教わった。

そして何よりもかけがえないたくさんの海の生き物たちとの出会い。イルカやクジラをはじめ、アザラシや海鳥たち、クラゲ、魚たち。彼らの海が汚されていることを目の当たりにして、環境に対する気持ちをより強く持つことができた。彼らのために、そして彼らとともに生きていく子どもたちのために、自分にできることを模索していきたい。

## 6、今後の課題

### (1) 持続可能な環境教育の必要性

#### i 渡航前の授業

小学校では、生活科や理科の中で「環境」という価値に触れる。研究と言う意味合いではなく、その中で知り得たことの中で、自分の生活スタイルの中でどのように生かし

ていくかを考えていくことに主が置かれているように思う。わたし自身、今回の研修にいくまでは、単純に教科書に準じて子どもたちと一緒に公園に行ったり、動植物について調べ学習をしたりする中で、何となく、「環境への意識は普通に生活していれば自然に育っていくものだ。」という楽観的な考えを持っていた。「子どもたちにどのような指導を、環境を意識できるか。」などということは恥ずかしながら漠然としか考えていないどころか、自分自身の確固たる考えも持っていなかった。

## ii 渡航中に感じたこと

今回、アースウォッチのプロジェクトへの参加が決定し、それまでの自分の「環境教育」の在り方に対して、いくつかのショックを受けた。

一つに、『環境』というものは、思っていた以上に複雑だということだ。私は、渡航前や現地に来てからもしばらくの間は、「いるかやくじらの保護」という活動に関わる中で、自分たちは「環境に良いこと」をしに行くという意識を持っていた。「少なくなっているイルカやクジラが一匹でも増えるのは環境に良いこと」というような考えさえ持っていた。しかし、現地で自然に触れたり、絶滅危惧種のことを学ぶうちに、単純に何かを増やしたり、保護することは「環境を守っている」とは言えないということがわかった。イルカやクジラだって増えすぎれば、その餌であるプランクトンや小魚は減る。また、動物保護センターに行ったとき、傷ついた猛禽類のために置いてあるたくさんのひよこの山を見て、生きるということは必ず食べ物を摂取することであり、食物連鎖を目の当たりにした。「動植物を保護する」ということは、生態系のバランスや、食物連鎖の中で、ある種が激増することでまた別の種の生存が脅かされることもあることを考慮して行うべきとても繊細な問題なのである。

## iii これからの環境教育

もっとも大切なことを環境問題には「正しい」という答えがない、ということである。子どもたちに「イルカは人間みたいに賢くて、かわいいから守らなければならないのだよ。」などということは全くの暴挙であると今は感じる。(しかし渡航前は、そのようなことを平気で言っていたかもしれない。)

では、環境教育を推進する上ではいったい何を指標とすればいいのか、ということをも自分なりに考えてみたのが下記の2点である。

○持続可能な環境の開発につなげる

○子どもたち自身が自分たちでやり方を考えていけるような授業計画

○身近な素材から

○興味を持ったこと、気づいたことをさらに深めていくための方法を教える

特に「持続可能な環境開発」というのは「環境教育」を考える上でのここ数年のキーワードである。多くの企業が取り組んでいる問題でもあるし、環境問題に対する取り組みを一時的なものではなく永続的なものにしていかないことにはやはり地球環境の悪化はとどまることを知らないだろう。また、2点目の子どもたち自身の発言で組み立てて

いくというのは、環境問題に正答がないということの自覚をうなづけるためにも必要である。教師が「ごみを分別しないといけない。」「水は大切にしないといけない。」ということで子どもたち自身が心から環境に問題意識をもてるとは思えない。結局環境が汚されていって、困るのは環境そのものではなく、自分たちである。「なぜそうするのか」「今何をしないといけないのか」ということを自分の問題として考えられる基礎作りが必要だ。また、「環境」を守るということは「環境を守る仕事」をしている人だけのものではない。今後、一人ひとりがどのような立場に置かれたとしても、その立場なりに「環境」に対して考えなければいけない、という共通の問題として意識付けをしていきたい。

3点目は、身近なものからアプローチしないと実感は得られないと考えるからである。今回私は幸運にも北の大地で珍しい経験をさせていただいたわけだが、その経験に執着しても、体験者以外がそれ以上の問題意識を高めるのは難しいだろう。やはり必要なのは直接体験だと思う。たとえば給食や近くの川の水質を調べるのもとても大切なことだろう。そしてさらに、興味を持ったことをさらに突き詰めていくにはどのように調べていくかと言うことを教えることも大切だろう。何かをきっかけとして、このことをもっと掘り下げていきたいという気持ちになったときにどのような方法があるのかを提示することだ。私もスコットランドから帰国して、「絶滅危惧種」について調べてみたり、また、「屠殺」についても興味を持ち、調べてみた。本やインターネットなど様々な媒体がある今、より正確な情報を得るための方法を示唆していく「メディアリテラシー」教育もとても大切なことと考える。

私にとっての「環境」について深く興味をもつきっかけとなるのが今回の旅であったように、子どもたちにも様々な取っ掛かりを与えてあげて、意識を高めることがとても大切なことであると感じた。

## (2)他文化理解教育の必要性

### i 他者を認め、自分のよさを再認識する

周りを他の国に囲まれたヨーロッパや、人種のるつぼアメリカなどとの違いとして、日本人はほとんど一つの文化の中で生きているという特徴がある。(国内での文化の違いは僅かなものだ。)もちろん、日本には日本ならではのよさがある。多くの日本人がその日本のよさを大切にしたいと思っているだろう。しかし、ある意味で、日本人は日本人の中で閉じこもってしまうという傾向もある。強い集団意識や、凝り固まった文化の中でそれに適応できないものは排除されるという冷たい部分もあるように思う。しかし、世界にはわたしたちが到底目に仕切れないような多種多様な文化がある。それを知ること、他国の文化を知り見聞を広められるというだけではなく、自分以外の他者の良さを認め、ひいては自分自身の新たな良さも再認識できるということもある。これらの利点は、昨今問題になっているひきこもりや不登校、いじめの問題などにも生かしていけるのではないかと感じた。「人間はちがって当たり前。違うこともすばらしい。」という

ことを体で理解するいい教材になるのではと感じた。

## ii 言語教育の在り方

今回私は、おおまかな内容は聞き取ることができたり、日常会話をしたりすることはだいぶできるようになったが、自分の文化や考えについて主体的に話したり、ナチュラルスピードについていけず苦労したことは多かったように思う。中学校、高校ではだいぶ勉強したのに、実践的にはほとんど使えないという悔しい思いも経験した。今回の参加者は、英語を母国語とするものが9名。母国語としないものが4名だった。同行者の江浜さんは、職場の中で生徒に指導したり、留学体験を生かして会話をしていった。イタリア人スタッフは、経験の中で、努力を続け、とても流暢な英語を話していた。また、ドイツから来た女性は、5年間英語を学んでいるが、私よりもずっと聞き取り話すことができていた。なぜ日本人は何年もかけて英語を学んでいるのに、ほとんど使えない人が多いのだろうかということを自分なりに考えてみると、下記の2点にその原因の一端があるのではないかと思う。

- だいぶ外国人の姿を見かけるようになったとはいえ、日本は島国であり、他国に比べると生活の中で外国人と接触する機会が絶対的に少ない。
- 文法中心の学習で、まずは会話をしてみたり、使ってみたりして体ごと慣れる期間がほとんどない。

今回の旅を経験するまでは、正直に言うと、日本語さえマスターしていれば、国際社会の議論の場などにおいても十分に戦えると思っていた。また、小さい子たちが日本語もままならないのに英語をどンドンと詰め込むような教育にはどちらかといえば反対の立場だった。しかしその考えは今回の旅で変わった。これからの国際社会の中で、よりよい環境で生き、よりよい人間たちと議論を交わすためには英語の能力が必須だ。それぞれの文化のほかに、国際的な場で非常に利便性の高い言葉として、英語はますます必要になってくるだろう。この考え方は英語至上主義でも何でもなく、他文理解教育のための一つのツールとして、より効果的な英語学習を進めていく必要があるだろうという一つの提案である。